

グローバル化を超えて — 文化的コモンスの共創

神戸大学大学院
藤野 一夫



人間には真・善・美を追求する欲求がある。これらは独立した価値でありながら、相互にバランスを保つ必要がある。真理追求の独走は科学万能主義に陥り、正義や道徳が他者とのコ

ミュニケーションを欠くと独善的、教条的になる。そのため芸術を媒介とした、感性に富んだ対話が求められ、こうした対話が、人間的なコミュニケーションを再生させる原動力となる。文学や芸術は直接社会に役立つ道具ではないものの、長期的に構想される社会変革の源泉となる。この点にこそ、経済的合理性とは異なる人文的価値の存在根拠がある。文化は、個人の内面を耕すと同時に、社会発展の土壌を耕すコミュニケーション行為という本質を持つのだ。

しかし一九六〇年代以降、バブル景気が、「イベント」として文化事業を全国に広げ、文化は一過性の消費財となった。各地の住民は、文化活動に主体的に参加することなく「文

化の消費者」となった。他方、近年の新自由主義的な政策においては、社会的包摂の道具として役立つ限りで芸術文化の為に公的資金を投入する動きもある。けれども芸術家の創造力は、既存の価値観や世界観を覆す「途方もないもの」を生み出し、政府や行政が手なずけることはできない。行政管理と芸術文化とは本質的に矛盾する。

こうした文脈から東日本大震災以降、「文化的コモンス(地域共同体の誰もが自由に参加できる文化的営みの総体)」に期待が寄せられている。文化施設が芸術鑑賞の場としてのみならず、文化的コモンス形成のプラットフォームとなれば、国家権力や経済的競争(狂騒)社会とは異なる、コミュニケーションに根ざした市民的でグローバルな交流の場が生まれる。事例として、神戸国際芸術祭やザクセン声楽アンサンブルとの日独交流を紹介した。こうした事業は、画一的なマニュアルを持たずにひとりひとりの創意工夫で丁寧に「共創」されていくのだ。

Profile

藤野 一夫
FUJINO, Kazuo

● 神戸大学大学院国際文化学専攻教授。ドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学、アートマネジメント。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。日本文化政策学会副会長。共著に「市民活動論(有斐閣)」「ドイツ文化史への招待 芸術と社会のあいだ」(大阪大学出版会)、「芸術が生まれる場」(東信堂)、「公共文化施設の公共性」(編著、水曜社)、「行政改革と文化創造のイニシアティブ」(美学出版)等、多数。